

中学生における悩みの対処行動と家庭環境との関係

A98 - 4414 小川千佳

A98 - 4426 白髭由己

(指導教官 朝倉隆司教官)

1、目的

本研究の目的は、現代の中学生はどのような悩みを抱えているのかという実態を知り、その悩みを解決するためにとっている対処行動を明らかにすること。さらに、その対処行動と対象者の家庭環境とどのような関係を持っているのかという傾向を明らかにすることである。

2、研究方法

i. 対象者 東京都内の公立中学校2校に通っている1～3年生、785名

ii. 調査方法 無記名式質問紙調査法

iii. 調査内容 ①基本的属性②現在抱えている悩み③健康評価④悩みを抱えたときにとる対処行動⑤家庭環境(親のしつけ)

iv. 分析方法 SPSS10.0Jを使用し、平均値の検定、独立性の検定、および相関係数の検定を用いて検討した。

3、結果と考察

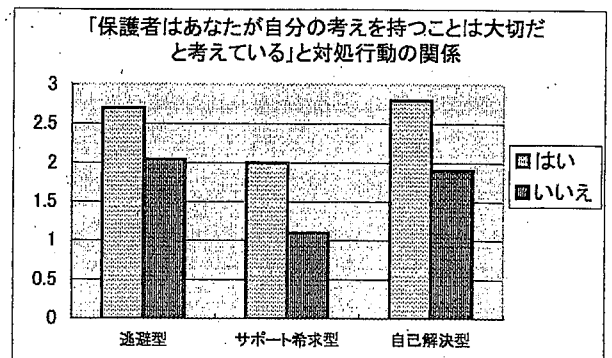
1) 悩みと対処行動について

11 領域で構成された悩みと対処行動との関係について相関係数を用いて検討した。各領域の悩みと次に示す対処行動の間には全て正の相関がみられた。男子では悩みを大きく感じる者ほど、「暴力をふるう」などの「攻撃型」の対処行動をとる傾向があり(0.118～0.262)、女子においては「自分の中にため込む」や「閉じこもる」といった「自己コントロール型」の対処行動をとる傾向が認められた(0.140～0.343)。このことから、男子は悩みを抱えたとき自分以外のものに対して攻撃的になり、女子は自分の中に抱え込みストレスをため込む傾向があることが分かった。

2) 家庭環境(親のしつけ)と対処行動の関係

これらの関係についてt検定によって、家庭環境の項目別に対処行動の平均値を比較した。その結果、「家族としての機能が成り立っている」ことを示す質問項目について、「はい」と答えた生徒の方が「逃避型」「サポート希求型」「自己解決型」の対処行動をとっている傾向が認められた。(これらは健康状態が良好と答えた生徒と関連が認められた対処行動である)その傾向が顕著に表れている「保護者はあなたが自

分の考えをもつことは大切だと考えている」という質問に対して、『はい』と答えた生徒の対処行動の領域別での平均点は「逃避型」で2.70点「サポート希求型」で2.00点「自己解決型」で2.80点であり、『いいえ』と答えた生徒は「逃避型」で2.04点「サポート希求型」で1.10点「自己解決型」で1.90点と比べ有意に高かった。(P<0.01)子どもの考えを尊重する環境で育てられた生徒の方が積極的な対処行動をとっているということがいえる。(下図)



逆に、「親の考えを押し付けられている」や「家族でいる時間が少ない」と感じているような、親に対して否定的な印象を意味する質問項目に「はい」と答えた生徒の方が「いいえ」答えた生徒より、『自己コントロール型』と『攻撃型』の対処行動(これらは健康状態が非良好と答えた生徒と関連が認められ対処行動である)の平均点が高く、有意に高かった。(P<0.05)よって、家庭内でのコミュニケーション不足を感じている生徒の方が消極的な対処行動をとりやすい傾向が見られる。

4、結論

悩みを抱えた時の対処行動と、親のしつけの間には関係が認められた。健康状態が良好となるような対処行動をとるためには子どもが親のしつけ方について肯定した考えをもてるような環境で育てることが大切であると考えられる。

5、参考文献

伊藤武樹：中学生の悩みとその対処行動、学校保健研究 Vol.35 p209-219 1993